

講演会「韓国におけるドイツ文学の翻訳と受容 ——多和田葉子の作品を中心に」

岡田莉子

2025年11月13日、ソウル大学校からユンヨン・チョイ教授をお招きし「韓国におけるドイツ文学の翻訳と受容——多和田葉子の作品を中心に」と題する講演が行われた。

はじめに、ユンヨン教授が現在所長を務めるドイツ・韓国文学翻訳研究所 (Institut für Übersetzungsforschung zur deutschen und koreanischen Literatur) について説明があった。同研究所では、韓国におけるドイツ文学の翻訳と翻訳批評を包括的に整理したデータベースの構築を目的としたプロジェクトUeDeKo (Uebersetzungen Deutschsprachiger Literatur ins Koreanische) が進められており、現在までに11,000点を超える作品が収録されている。これにより、どの作品が、いつ、誰によって翻訳されたのかといった翻訳出版情報を把握できる仕組みが整えられている。

このような取り組みが始まった背景として、韓国における翻訳文学の多様な状況が挙げられるという。たとえば、ゲーテ『若きウェルテルの悩み』には約100種類の韓国語訳が存在するが、タイトルが微妙に改変されている。タイトルに含まれる‘Leiden’が、日本語では「悩み」と訳されるが、韓国語では「슬픔 (悲しみ)」、「고뇌 (苦悩)」、「고통 (苦痛)」、「괴로움 (寂しさ)」などに分かれ、訳語の選択によって作品解釈の焦点が異なる。そのため、翻訳の正誤や優劣を問うのではなく、翻訳者がなぜそのような形で訳したのかを可視化できれば、読者の作品選択や読解の助けになるのではないかと考えたユンヨン教授は述べる。

次に、韓国におけるドイツ文学の変遷について説明があった。韓国におけるドイツ文学の翻訳は日本植民地期には始まっていた。20世紀初頭の韓国では、翻訳者は外国文学の受容に際して大きな裁量を持ち、受容、新規創造、混成、距離、拒絶といった異なる適応戦略を選択し得たため、翻訳を通じた受容、交流、創造の活発な空間となっていた。1930年代にはドイツ語を学んだ人たちによる、別の言語を経由せずドイツ語から韓国語に直接翻訳する手法が進んだが、1940年から45年にかけては専門的な翻訳者が減少し、状況は後退してしまう。

1960年頃に入ると世界文学のブームを背景に世界文学シリーズが多数登場し、翻訳出版が増加する。そして、1980年代には「ハングル世代」と呼ばれる日本語の影響を直接受けない若い世代が台頭し、直接翻訳が標準化していく。1990年以降はベルリンの壁崩壊とドイツ統一の影響もあり、翻訳と研究の焦点が、記憶、アイデンティティ、他者性、ポスト構造主義、ポスト植民地主義、フェミニズムなど多様なテーマへと関心が拡大し、韓国におけるドイツ文学の受容は飛躍的に大きく広がった。



講演の後半では、ユンヨン教授も翻訳を務め、近年韓国でも注目される作家・多和田葉子について論じられた。多和田葉子は、日本語とドイツ語で創作を行う作家であり、言語や文化の境界を超える高い文学性が評価されている。韓国でも、多和田葉子の作品は母語の自由さや表現に潜む偏狭さを気づかせるものとして評価されているという。講演では、多和田葉子の作品に特徴的な越境性が、言語、文化のみならず、アイデンティティ、他者性、翻訳、文化比較、さらには動物や自然をめぐる諸言説へと広がっている点が指摘され、日本研究においてもこれらの観点から検討が進んでいることが紹介された。

講演後の質疑応答では、フロアからUeDeKoに掲載される翻訳の書評の基準や、書評のみで読者が満足してしまう可能性などについて質問が寄せられ、データベースの目的に関する議論が行われた。当日は学部生を中心に年齢や分野を超えて約50名が参加し、盛会のうちに終了した。

韓国におけるドイツ文学の翻訳と受容——多和田葉子の作品を中心に

Übersetzung und Rezeption der deutschen Literatur in Korea — mit besonderer Berücksichtigung der Werke von Yoko Tawada

講演者：ユンヨン・チョイ教授（ソウル大学校）

日時：2025年11月13日（木）16:00～17:30

場所：東京外国語大学研究講義棟107教室

司会：西岡あかね（東京外国語大学准教授）・山口裕之（東京外国語大学教授）

言語：ドイツ語・日本語（通訳あり）

主催：東京外国語大学総合文化研究所

韓国における ドイツ文学の翻訳と受容

——多和田葉子の作品を中心に

Übersetzung und Rezeption der deutschen Literatur in Korea
— mit besonderer Berücksichtigung der Werke von Yoko Tawada

11月13日 (木)

16:00-17:30

場所：東京外国語大学研究講義棟 107 教室

* 西岡あかね先生の授業の枠内で行われる講演ですが、どなたでも参加できます。

講演者 ユンヨン・チョイ教授(ソウル大学校)

専門はドイツ文学。ソウル大学校人文学部で要職を歴任、ドイツ、韓国、アジアにおけるドイツ文学のさまざまな学会組織で運営にも精力的にたずさわる。

著書『エクソフォニー 多和田葉子のエクリチュール』(韓国語)の他、エツダマー『母の舌』、多和田葉子『うろこもち』、『雪の練習生』をはじめとして、数多くのドイツ語作品の韓国語への翻訳を手がけている。

司会 西岡あかね(東京外国語大学准教授)
山口裕之(東京外国語大学教授)

言語 ドイツ語・日本語

(講演はドイツ語ですが、日本語通訳がつきます。質疑応答も日本語で大丈夫です)

主催：総合文化研究所